魔法少女リリカルなのは　StrikerS　～小さな少年の小さな勇気～

海翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～小さな少年の小さな勇気～

【Ｎコード】
Ｎ０２５０Ｚ

【作者名】
海翔

【あらすじ】
機動六課設立２年前フェイト・Ｔ・ハラオウンによって救われた少年。その少年はフェイトの養子となり機動六課に出向する。そして、これから大きな事件へと巻き込まれる。若き魔導師の生き様を描いた物語。魔法少女リリカルなのは　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～小さな少年の小さな勇気～始まります。

PL　出会い

PL

Ｓｉｄｅフェイト

２年前……

私はその日執務官の仕事である組織を落とす段取りをしていた。
その組織は魔導師臓器売買を主とする組織で、本局の魔導師もかなりの数が殺されている。
組織はそこそこ大きく、相手も魔導師を雇っているためこちらも魔導師の平均ランクをＡＡ以上にする必要がある。
本局魔導師でも空戦、陸戦にとわずＡＡというのはそれほど多くない。
どう頑張っても少数精鋭の部隊になる。

「テスタロッサ・ハラオウン執務官、準備が整いました」

「わかりました」

今回召集した人員の準備が整い、転移の準備も終了した。

「これより、敵本拠地に行きます。皆さん死なないでください」

そう言って、すぐに敵の本拠地に転移、臨戦態勢をとる。
敵が襲ってくる。
そう思って全員がデバイスを前に突き出す。
しかし――――

私たちの前に現れた光景は彼らの想像をはるかに超えるものだった。
いや――――
私も度胆を抜かれた。
私たちの目の前にあったのは――――

死体

――――ただそれだけだった。
それもただ殺されているだけではない。
ある者は腸(はらわた)をぶちまけ、
またある者は頭を破壊され、脳をあらわにし、
またある者は首から上が切断され、
またある者は下半身が丸ごとなくなっている。
そんな死体――――
いや
”もの”だった。
それも理解した瞬間、死体が放つ独特の異臭が鼻を突く。
胃の中のものが逆流するのを感じる。
それを必至に堪える。
しかし、後ろの隊員は我慢できずに嘔吐する。
吐き気を耐えきった私は隊員に告げる。

「気分の優れない者は艦隊に引き返してください」

それを聞き隊員たちは次々と戦場を離脱。
結果残ったのは私を含めた5名だけだった。

「それでは行きます」

ゆっくりだけど確実に一歩一歩進み続ける。

もちろん警戒は怠らない。
そばらく歩くと、小さな人影が見えた。
ゆっくりと近づき、影と私たちの距離は１０ｍくらいになった。
「……」
近づいたからわかるが影の正体はまだ体も出来上がっていない子供だった。
背丈からして１０歳もない。
その少年は右手に短いナイフを握っている。
左手にもよく見えないが何かを握っている。
「あなたはここで何をしているのですか……？」
私は少年に聞く。
しかし、少年は何も答えない。
代わりにゆっくりと振り返ろうとする。
「……」
私もバルディッシュを構える。
少年は振り返る。
少年の顔が光にさらされる。
「――――っ！！」
私は少年の表情に驚く。
少年は……泣いていた。
表情自体は笑っている。

それでも、眼からは涙が流れている。
少年はそんな表情のまま告げる。
――ボクヲコロシテクレルノ？――
「な、に…？」
一人の隊員が驚いたようにつぶやく。
少年は尚も続ける。
――ハヤクボクヲコロシテ――
少年は一歩づつこちらに近づく。
少年が近付いたおかげで少年の全体を光が照らす。
少年が照らされた瞬間、私たちに戦慄が走った。
少年の右手にはさっき見た首が切断された死体の頭が握られいた。
――ネェコロシテヨ？――
少年はまた近づいてくる。
私たちは一歩下がる。
しかし、ここで私は考えた。
なのはならこの状況をどうするだろう、と。
なのはならあの子に砲撃を浴びせるだろうか？
なのはならあの子を殺すだろうか？
なのはならあの子を見捨てるだろうか？
答えは――――
否――

彼女ならこの子を助けるだろう。
彼女はこの子と話すだろう。
――彼女なら――
そう考えていたら、勝手に体が動いていた。
「私は、私たちは君を殺さないよ」
その言葉に少年は驚くことなく言葉を発する。
――ナンデ？――
そう彼はいった。
「君を救いたいから」
ゆっくりと言葉を紡ぐ私に隊員たちは唖然とする。
「何言っているんですか執務官！！」
「こんなにやばい子は早々に殺すべきです！！」
そんな心許無い言葉に私は頭に血が上る。
「黙ってください」
そういうとまた言葉を紡ぐ。
「私は君を助けたい。それが理由じゃ…ダメかな？」

彼は笑顔を崩さず、また歩みを止めない。

――ダメダヨ、ボクハコロサレナキャイケナインダ――

「そんなことはないよ」

言葉を慎重に選びながら私もまた彼に向って歩き出す。

――ボクハシナナキャイケナインダ――

「なんで？」

――ボクハイッパイヒトヲコロシタカラ――

「殺したくて殺したんじゃないんでしょ？」

――ソレデモコロシタコトニカワリハナイヨ――

「じゃあ、私がそれを許してあげる」

お互いに歩み続けた結果、今私たちは向かい合っている。
あと一歩踏み込めば彼の体に触れることができるくらいに……。

――ユルシテクレルノ？――

「うん、私が許す。だから泣いてもいいんだよ？」

私は彼をやさしく包み込む。

「だから、一緒に行こう？」

そうして彼は静かに泣き始めた。

これが私と彼の出会い。

ＰＬ　出会い（後書き）

初めて二次創作に手を出してみましたが、いろいろ大変ですね。

今回はＰＬということで主人公の過去について書いてみましたが、

なんか…こう…ひどくない？

グロくない？

ひどいよですよね、これ。

主人公の過去に何があったか逆に気になります、おもに私が。

ということで、なのはの二次創作～小さな少年と小さな勇気～を始めてみましたが

至らぬ点など多々あると思いますが、長い目で見ていただいたら幸いです。

あ、感想とか改善してほしい点などはどしどし言ってください。

がんばります。

おそらく不定期で行進とになると思いますが気長にお待ちくれたら嬉しいです。

では、次は１話にて。

最後まで読んでいただきありがとうございます。

第1話　彼の始まり（前書き）

祝1話！！

最近小説を書くのがつらく感じる時があります……。

なぜでしょう…？

でも！！

これだけは最後まで書いてみせる！！

今回なんかグダグダする予感が……。

気にしないことにしましょう。

気にしたら負けでしょう…たぶん。

では、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～小さな少年の小さな勇気～

第1話　彼の始まり　始まります

第1話　彼の始まり

1話　彼の始まり

「ジュン、起きて」

「はぁ～い」

夢を見ていた……。
すごく懐かしい夢。
僕と母さんの出会いと始まりの事件。
荒んだ場所。
腐臭の匂いが漂うあの場所。
あのにおいが嫌で……。
人を殺したという感触が嫌いで……。
自分をモルモットとしか見てないあの研究員たちが嫌で……。
そんな中僕は子供ながらに思った。

――死にたい――

そんな間違った考えから救ってくれた目の前の女性、フェイト・T・ハラオウンの力になりたくて……。
僕は陸士士官学校に入学した。
もちろんお金なんてなかった。だから、フェイトさんに当時土下座してまで頼もうとしていた。
しかし、フェイトさんは快諾して、さらに――

『私の養子にならない？』

――とまで言ってくれた。もちろん僕もこれを快諾した。
そして、士官学校を1年で首席卒業。
陸戦Bランクを取り、母さんの執務官補佐としてこれまで1年半務めてきた。

「ジュン？　どうかした？」

「いや…なんでもないよ、母さん」

「あんまり無茶したらダメだよ？」

「わかってるよ」

母さんの過保護っぷりは今に始まったことではないが、これではエリオさんやキャロさんも苦労するだろう。

「ジュン一等陸士、準備が整いました」

「ありがとうございます」

どうやら転送準備が終わったようだ。

「行こう、母さん」

「うん」

僕たちは1週間後から1年母さんの幼馴染である八神はやて二等陸佐が今度立ち上げる新設部隊「遺失物管理部・機動六課」
FW（フォワード）は全員新人。

いや――
ＦＷだけではない。
ロングアーチや整備士、デバイスマスターまでもが新人で構成されている。
そんな場所に僕が行ってもいいのか疑問だ。

「それではみなさん、しばらくのお別れですがしなない程度に頑張ってください」

「私たちは機動六課に行くけどみんなも元気でね？」

『ハイ！！！』

そう言って僕たちは部隊員の人たちに別れを告げた。

場所は変わって陸戦Ｂランク試験場。

「あ、フェイトちゃん、ジュンくん」

ヘリポートで待っていたはやて二佐がぼくたちに手を振る。
母さんは手を振り返し、近づいていく。

「お疲れ様です、八神二佐」

軽く敬礼をする。

「久しぶりやね、ジュンくん。あとはやてでいいで」

「そんなわけにはいきません。非公式の場ではそれでも構わないか

も知れませんですが、ここは公式の場ですので」
「そんなこと言わなくてもいいんじゃねぇか？」
そう言ってヘリの中から出てきたパイロット。
確か機動六課でヘリのパイロットをする――
「ヴァイス陸曹ですね？」
「あぁ、ジュンだったな」
「はい、ジュン・T・ハラオウン一等陸士です」
「よろしくな」
そして、僕たちはヘリに乗り込んだ。
「この二人がはやてが見つけた子たちだね？」
「うん、二人ともなかなか伸びしろがある子や」
えっと、スバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士か。
階級僕より下じゃないか。
年齢上なのに…。
僕が異常なのか？
「うん、異常や」
「八神二佐、勝手に人の心読まないでください」

「異常じゃないわけないやろ？　陸士士官学校を5歳で入学。1年後には首席卒業。その後フェイトちゃんの切り札として活躍。わずか7歳にして一等陸士」

「うん、ジュンは異常だね」

「異常っすね」

母さんだけは信じていたのに、あっさり肯定された…。
泣きたい……。

「あ」

「どうしたんですか？」

「どうもサーチャーに流れ弾が当たったみたいなんよ」

どうせ、どちらかが無茶した結果だろう。

「なのはに任せよ」

そやね、とはやてが言って3人が見守る中、ランスター二士が出てくる。
全員が無茶、無謀と考えているだろう。
でも僕は違う。
この2人は才能に満ち溢れている。
だから僕はこの2人が絶対合格すると確信している。

「それでは、僕は仕事がありますので」

「あれ？　なんか仕事あったっけ？」
母さんが疑問に思うが僕はゆっくりと首を横に振る。
「高町教導官が考えていることを先に用意するだけですよ」
「？？？」
おそらく高町教導官はこう考えるだろう。
『実力や魔力値はBランクを超えているけど、危険行為により減点。
しかし、このまま陸戦Cランクでいるのは危ないので、本局の先輩からいろいろ学ぶための推薦状を用意した。
3、4日後には再試験が受けれるように手配しよう』
とまぁこんな感じだろう。
地上本部の顔見知りは結構多いので頼めばやってくれるでしょう。
「では、お先に失礼します」
「あ、うん。お疲れ様…」
さて、高町教導官と僕の信頼できる先輩は……。
「いるのかな……？」
そう呟いて、ジュンはヘリから飛び降りた。
「フェイトちゃん、ジュンくん大丈夫なん？」
「うん、大丈夫。一応飛べるから」

そういう意味やないんやけど、と思うはやてであった。

所変わってとある一室。

「部隊名は『時空管理局本局・遺失物管理部・機動六課』！！」

「登録は陸士部隊。ＦＷ陣は陸が主軸やな」

八神はやては自分が部隊長を務める部隊のあらましをスバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士に説明していた。

そして、その時ジュンはというと――

「高町教導官」

「ん？　あ、ジュンくん！！　久し振りー！！」

「はい、お久しぶりです高町教導官」

ジュンは軽く敬礼をする。

そんなジュンに苦笑するなのは。

「どうしたの？　なんか用事？」

「はい、高町教導官にこれを」

ジュンはなのはに封筒と中に入れる書類を渡す。

「なにこれ？」

「本局の先輩たちによる講習。その承認の書類です。必要かと思いまして勝手に用意させてもらいました」

「いいよ、ありがとう。助かったよ」

「では」

Ｓｉｄｅなのは

「では」

そう言って引き返していく。

あれ？

「フェイトちゃんのとこのにはいかないの？」

「まだ仕事があるものですから」

ジュンくんはそのまま歩いて行った。

執務官補佐って忙しいのかな？

ＳｉｄｅＯｕｔ

「ヤバいな、遅れてる」

あれから1週間の時間がたち、機動六課設立のあいさつの時間にジュンは六課隊舎内を走っている。

ジュンは昨日地上本部の会議のセッティングに思ったより時間がとられ、気がついたら朝日が昇っていた。

八神部隊長の挨拶まで多少時間があったので仮眠をとっていたら……

「ごらんの有様さ……。ん？」

ジュンが隊舎を走っている途中、なのはが視界に入りなのはの方向に向きをかえ再び走る。

「高町教導官」

「あ、ジュンくん。遅刻だよ」

「申し訳ありません……」

ジュンはもう魔王モードにならないことを祈り、謝る。

「あとで、はやてちゃんに挨拶するんだよ？」

「はい……」

「じゃあ行こうか」

このとき、ジュンは疑問を抱いた。

この後のジュンの予定は、会議に出席し書類をまとめ、シャワーを

浴びて寝ることだった。
やっていることは少ないが実はこれはすごく大変で、会議に出席した時には一字一句間違うことなくそれぞれ先方の言ったことなど記録しなければならない。
これはジュンが勝手にやっていることだが、ごく稀に会議で言っていた内容と違うといちゃもんをつける輩がいるからだ。
これの対処に困っていた母さんに何かいいアイデアはないか、と聞かれてこれを始めた。
それでも、長くやっているとキーをたたくスピードは上がるがそればかりにかまけている暇は執務官補佐にはない。
時には執務官の意見の穴を突いた輩の穴を突き返したりとやることは山づみだ。
だから、母さんの補佐は結構気疲れするのだ。
しかもそれを母さんに気づかれないように振る舞わなければならない。
そんな仕事があるのに高町教導官は”じゃあ行こうか”といった。
４人のＦＷメンバーを後ろにひきつれて。
ここまでくればもう明らかだ。
ようは”訓練行こうよ”ということだろう。
しかも教導官は高町なのは。
これはもう必然的に『ジュンくんの実力が知りたいから模擬選やろうか？』という展開が目に見えている……。

「いや、でもフェイト執務官の許可が――」

取れてませんと続けようとしたが――

「フェイトちゃんの許可なら取ってるよ？」

ジュンの逃げ道は早々に崩れ落ちた。

「わかりました……」

しょうがないのでなのはの後についていくジュン。

哀れジュン……。

訓練場につき、ＦＷとの自己紹介が終わっていないので自己紹介をしろとの魔――もとい、高町教導官がおっしゃった。

「なんか魔王って聞こえた気が……」

「気のせいでしょ？」

「じゃあ、自己紹介しようか。スバルから」

「はい！！　スバル・ナカジマ二等陸士です！！」

「スバル、何階級下の子に敬語使ってるのよ。ティアナ・ランスター二等陸士よ。よろしくね」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。こっちはフリード」

「キュクル～」

「エリオ・モンディアル三等陸士。よろしく」

じゃあ、次はジュンくんだね、と促させるまま順は自己紹介をした。

「えっと、ジュン・Ｔ・ハラオウン執務官補佐です。階級は一等陸

士です」
最後によろしくお願いしますと付け加え、きれいな敬礼をする。
「「「「「えぇ～！！！」」」」」
「一等陸士って年齢は！？」
ティアナがすぐに質問する。
「7才ですね」
「テスタロッサ・ハラオウンっていうのは！？」
「フェイト・T・ハラオウンは僕の母さんです」
「じゃあ、ジュン一等陸士がフェイトさんの切り札って言われている！？」
「世間一般ではそう言われてるそうですね」
みんなもう黙りこくる。
すると、ティアナがいち早く我に返り叫ぶ。
「失礼しました、ジュン一等陸士！！」
きれいな敬礼を見せる。
そのあとに続いてFW全員が失礼しました、と言って同じく敬礼をする。
ジュンはおろおろしてどうしようか迷っている様子。

それを見て、後ろで腹を抱えて笑うなのは。

「いや、あのですね…僕のことは呼び捨てでいいですよ」

「はぁ…しかし」

それでもティアナは下がらない。

「年下に敬語って嫌じゃないですか？」

「いえ、そんなことは！！」

ジュンはやれやれと言って言葉を紡ぐ。

「僕はさ、尊敬すべきは”階級”ではなく”年齢”だと思うんです」

「”年齢”ですか…？」

「うん。”階級”は各々（おのおの）が上げた戦績を示すけど、”年齢”は各々が歩んできた人生を示します。そして、さっき言ったのを詳しく言えば、尊敬すべきは”人生”であって”戦績”ではない。確かに軍人として何より大切なのは軍規と階級、そして命令です。だけど、人として大事なものは敬愛するということとは思いませんか？」

「は、はぁ……」

「どんな人でもそれぞれに歩んできた人生があります。人によっては悲しい過去や苦しいことだってあったかもしれません。でも、その人は今を生きているんです。自分よりはるか多い年月を」

ＦＷ陣はもちろん、さっきまで笑っていたなのはさえもしっかっり聞いている。
それほどにジュンの言葉は重く感じた。
この場の全員が思うことだろう。
彼に一体何があったのかと――
一体なぜ彼はここまで考えたのだろう――
彼はここまで追い込まれていた時期があったのだろうか――
たった7歳の彼に一体何が――と。

「しかし、その人の階級は三等陸士です。つらい過去を持ったにもかかわらず。そんな人を顎で使う人もいるかもしれない。ですが、僕はそんな人になりたくはない。そう思ったからこそ僕はこの持論を掲げているのです」

「ですので、僕のことはどうか”ジュン”と読んでください」

「……」

「ダメですか？」

「……」

ジュンは自分の思いをすべて話した。それでも呼んでくれないのかと思うと何のために話したのか分からなくなる。
しかし、ティアナたちＦＷ陣はなにも返せない。

「……ダメならだめで結構ですよ？　自分の持論を他人に押し付けることはしませんから」

ジュンは優しく言う。
別に彼女たちが悪いわけではない。
でも、自分が悪いわけでもない。
それでも、自分の考えが否定されたようで悔しくなる。

「高町教導官、訓練を始めましょう」

「あ、う――」

「ジュン――」

なのはの返事に割って入るような感じでスバルがジュンの名前をつぶやく。
その言葉にジュンは目を見開いた。

「ジュン――」

「ジュンさん――」

「ジュン」

スバルに続いてティアナ、キャロ、エリオの順でジュンの名前を呼んで行く。
そして、ジュンは――

「はいっ！！」

満面の笑みで返事をした。
それが機動六課での彼の始まり――

第1話　彼の始まり（後書き）

ということで、第1話　彼の始まり　どうでしたか？

なんかグダグダなような、そうでないような…。

そんな感じが否めませんね。

それにしても、いや～主人公の身にいったい何があったんでしょうね？

おもにフェイトに出会う前。

作者のはずの私が一番気になっていると思うのですが……。

何と行き当たりばったりな小説！！

落ちが決まっていないのに書くとは！！

愚かなリ私！！

まぁでもそんなものでしょ？

あぁにしてもジュンくんの変わり具合が半端ない…。

もともとですね、ジュンくんは”仕事ができるが人見知り”なかわいい男の”娘”にする予定だったんですよ！？

それなのに……それなのに！！

いつの間にか外見に見合わない精神年齢の少年に……！！

あぁ～本当のジュンくん帰ってきて～！！

まぁそんなことはさておき、どうです、1話。

なかなかいいで――きではないですね、ハイ。
楽しんでくれているなら幸いですが、そうでない方は読むのをやめることをお勧めします。
もうしばらくはこんな感じで進むんで、見苦しいと思います。
それでもいいという方はぜひ見てあげてください。
これはもう趣味に近いので。

では今回はこの辺で。
次は2話ですね。
できるだけ早く仕上げるので遅くてものぞきに来てくれたらうれしいです。

第２話　模擬戦（前書き）

ＦＷメンバーとの自己紹介も終わってこれから訓練！！という時になのはから模擬戦の話が持ち上がる。
それをある程度察知していた彼――ジュン・Ｔ・ハラオウンは諦めて模擬戦をやることに……。
ジュンは一体どうなうのか…？

それでは――
魔法少女リリカルなのは　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～小さな少年の小さな勇気～
第２話　模擬戦　始まります。

※私は戦闘シーンを描くのが下手なので、見てられないと思う方は見ないほうがいいと思います。

第2話　模擬戦

第2話　模擬戦

Ｓｉｄｅジュン

「ジュンくん、模擬戦しようか」

自己紹介が終わって高町教導官が模擬戦の準備をしながら言う。

「了解しました……」

僕はもう半ばやけくそ気味に高町教導官に従った。

「デバイスのこと聞いていい？」

僕はいいですよ、と答えて模擬戦の場所の地理を確認する。

「ジュンくんはミッド式？　それともベルカ？」

「ミッドです」

「デバイスの形状は？」

「ナイフです」

高町教導官はなるほど、と考えこむ。
相手が高町教導官なら僕の最も苦手とする距離（レンジ）。
おそらく普通にやったら負けるだろう。
秘策でもない限りは…。

「相手は私でいい？」

「僕は構いませんが…」

僕がそういうる言うはただ一つ。
ここの部隊長が八神二佐なら当然守護騎士もいるわけで…。
ということは、シグナム二尉がいるということ。
なぜシグナム二尉が嫌かって？
そんなのあの人が戦闘マニア（バトルジャンキー）だからだ。
僕自身は戦ったことはないけど、フェイト執務官は結構戦っている。
フェイト執務官との戦闘を見ていると、あの人がニヤリと笑うのが見える。
そんな人が僕の模擬戦相手になったらと思うと……体が震えるよ。

「待て、高町。武器が刃物なら私が妥当だろう？」

ほら来たよ、言ってるそばから。

「私は別にいいけど…。フェイトちゃんに『シグナムとは戦わせたらダメ』って言われてて…」

「むぅ…」

「だから、ごめんね？　シグナムさん」

「私とて新人相手に手加減ぐらいできる！！」

あれ？

シグナム二尉何か勘違いしてないか？

「あぁ、違うの。フェイトちゃんがね『シグナムは初見でジュンには勝てないから』って」

「私が新人に負けるといいたいのか、テスタロッサは…」

「よかろう！！　私が新人に劣っていないことを証明してやろう！！　来い、小僧！！」

えー…。

結局模擬戦の相手はシグナム二尉に…。

泣いていい…？

ＳＩｄｅＯｕｔ

現在シグナムとジュンは模擬戦のため、向かい合ってバリアジャケットを展開している。

ジュンのバリアジャケットは、基本的にはフェイトを参考にしているためスカートがズボンになったこと以外はさして変わらない。

軍服調の黒いバリアジャケット。

ついでに、マントはジュンが邪魔と言ったのでない。

「では、始めようか」

シグナムの言葉にジュンは頷く。

『じゃあ、始め！！』

なのはの合図とともにまっすぐジュンに向かうシグナム。
ジュンはそれを見て、とっさに後ろに飛び退く。

「甘い！！」

が、シグナムはジュンに向かってなおも走る。
そして、力いっぱいレヴァンティンを振るう。

「剣をよけたくば後ろに下がるなんて愚行はよすんだな！！」

「後ろに下がることは愚行ではありませんよ、シグナム二尉」

その言葉と共にジュンはゆっくりと姿を消してゆく。

「っ！？」

シグナムはジュンが消えた位置を空振りする。
すぐさま後ろに跳びジュンがいた位置から距離をとる。

（なんだ、今のは…？　幻術？　いや、ジュンの稀少技能（レアスキル）か？）

「そうですよ、シグナム二尉。僕の稀少技能（レアスキル）…名を『インビジブル』と言います。その名の通り、僕の姿を消す能力です」

「なるほどな……」

シグナムはこれは厄介だ、と考える。
姿を消すだけならば、達人は気配から位置を探ることができる。
だが、もし、ジュンの『インビジブル』に気配も消す能力までもが付与されているならば、相手に悟られず相手を無力化できる。
危険極まりないレアスキル。
しかし、レアスキルにも弱点が存在するものもある。
何かを代償にそのスキルを使っている可能性は十分にある。

（一体何を払っているのか…それを見極めれば私の勝ちだ！！）

「考えてる暇はありませんよ」

「――何！？」

不意に、声が後ろからしたので、振り返れば姿を現したジュンがナイフを振るっていた。
とっさにレヴァンティンをかざし、それを防ぐとジュンは再び消えていった。

「なんと厄介な……」

戦闘は視覚で行っている部分が多いため、多くの戦士は見えない攻撃に怯え、やられる。
今のシグナムのように簡単に不覚を取る。

「次行きますよ！！」

その声と同時に後ろからナイフが一本投擲（とうてき）される。
シグナムは普通にレヴァンティンで上に弾く。

「取った！！」

言葉と同時に姿を現すジュン。
ジュンはシグナムの上をとった。
上にはじかれたナイフをジュンはキャッチ。
そのままシグナムに向かって一直線に落ちる。

「ちっ…！！」

再びレヴァンティンをかざし、それを避ける。
ジュンはレヴァンティンを踏み台にしてシグナムのはるか後方に下がる。
そして、『インビジブル』を発動。
シグナムの前から姿を消す。

Ｓｉｄｅシグナム

ふむ。ジュンの戦い方は理解した。

相手の目の前から姿を消し、不意を突く。
戦術の基礎を生かした戦い方。

だが、その戦い方には弱点がある。
ジュンのレアスキル『インビジブル』は攻撃前には必ず解ける。
そういう制約のもとで発動できるのか、または消える時間に制限があるのかは疑問だが攻撃の前に溶けていることが今は重要。

こいつは伸びる。

ジュンは頭がいい。攻撃も7歳にしては鋭い。
作戦もいい。剣筋っといっていいかは疑問だが、それも結構高いランクだ。
何より私はジュンの面構えが好きだ。
一流の剣士の顔をしている。
凛々しく、諦めず、それでいて強い。
だからこそ、ここで私が敗北の味を味あわせなければ奴はいつか落ちる。
高町のように……。
私は不器用だからな。
こんなことでしか貴様を守れん。
だが、私は不器用なりにこいつを守りたい。
そう思えた。

主はやて、テスタロッサ…。すまない。
私はこいつのためにこいつを斬る！！

「レヴァンティン！！」

≪ロードカートリッジ≫

「紫電――――」

「――――一閃！！」

ＳｉｄｅＯｕｔ

シグナムがカートリッジを排出する。
それと同時にジュンは真正面からシグナムに突撃する。

「紫電――――」

レヴァンティンに炎熱効果が付与される。
それを見てもスピードは緩めない。
ナイフを振るった一瞬、ジュンの体が現れる。

「――――一閃！！」

レヴァンティンが振るわれ、ジュンの体に直撃。
が、しかし――――

「な！？」

ジュンの体は一瞬で消えさる。
ティアナのフェイクシルエットのように…。
そして、ジュンは後ろからシグナムに手刀を繰り出す。

「がっ！！」

そのまま、シグナムは崩れ落ちた。

模擬戦４時間後。

「――――っ！！　ここは…」

「医務室ですよ」

シグナムは模擬戦で落ちてから４時間きっかりで起きた。

「シャマル…そうか、負けたのか…」

「シャマル、シグナム起きた？」

シグナムが起きてすぐにはやてが入ってくる。
驚いたが数時間前に帰ってきたのだろうと思い、シグナムは申し訳なさそうに頭を下げた。

「すいません。負けてしまいました」

「それはええよ。それより、ジュンくんのことについて分かったことある？」

ある程度予測していたのか、シグナムはすぐに答えだした。

「あのレアスキルは危険です。どこまで何を消せるのか、それが初見ではわかりません。さらに奴は頭が切れる。どのような状況から相手の弱点や隙を見つけるかわかりませんし、それを相手に悟らせることもありません。あの能力は以上です」

はやてはふむ、と考え込んで、体長陣とジュンを部隊長室に集まるように念話を飛ばした。

5分後。

全員が集合し、はやてが率直に聞きに行く。

「ジュンくん、あの『インビジブル』とやらの事詳しく説明してくれへんか？」

「『インビジブル』？　そんなスキルないですよ、僕は」
そこにいた全員がえ、っという顔をする。
ちなみに、フェイトを除く。
Ｓｉｄｅジュン
みんな何を言ってるんだろう？
「じゃあ、あれは一体……？」
シグナム二尉が聞いてくる。
あれ、言ってなかったっけ？
でも八神二佐が知らないのはおかしい。
「八神二佐、書類しっかり目を通しましたか？」
「え、いや。まだやけど…」
「では、この際です。僕の能力を話しましょう」
あんまり気が進まないけど。
「僕が使った『インビジブル』なる能力。そんなの存在しません」
「「「「は…？」」」」
「僕が使えのはフェイト執務官が使える『ソニックムーブ』と『幻術』だけです」

「え、でも…模擬戦してるときモニター越しに見たけどそんな様子はなかったし私たちにも消えたように見えてたよ？」

高町教導官の質問にみんながうなずく。

これ僕の切り札なんだけど…。

「僕の幻術は少し強すぎるみたいで、機械越しにでも少しだけ聞くんです」

まぁ、今はこの認識でいいか。

面倒だし。

「では、説明しますね。僕は射撃魔法や一撃必殺と言えるレベルの魔法がないので、相手と対峙した時に決め手に欠けます。それを単純に幻術で補っているだけです」

「補うってどうやってなん？」

まぁそこだけ聞いたらよくわかりませんよね。

「まずは模擬戦のことについて解説します。僕は長期戦には向きませんから模擬戦は短期決戦で決めなければなりません。そこで、まず相手であるシグナム二尉に幻術をかけます。僕が”消える”という内容です。次に言葉によって相手の思考を制限します」

「思考の制限？」

ええ、と高町教導官に返事する。

「シグナム二尉はおそらくはじめに”幻術”という可能性を考え、次に”レアスキル”の可能性を考えたはずです」

シグナム二尉が自分の考えが読まれていたのが悔しいのか、むっとした表情で返す。

「ああ、そうだ」

「そこで僕は”消える”ことが”レアスキル”かのように話します。そのあとシグナム二尉は完全に”レアスキル”と判断し、弱点を探そうとします」

実際シグナム二尉は弱点を探すために防戦に徹していた。

「次に弱点をわざと露見させます。今回の場合は”攻撃時に姿を現す”というものでした。そして、シグナム二尉はそれを本格的に弱点と判断。それに合わせて必殺の一撃を決めれば終わるとみます」

確かにあの時、シグナム二尉は紫電一閃のためにカートリッジを排出した。

あれが決まれば負けてましたが。

「シグナム二尉が弱点と判断した後にまっすぐに突っ込みます。そして、姿が現れればそれを”本物”と思い、紫電一閃を放つでしょう。そう予測しました。見事にシグナム二尉ははまってくれました。そのあとは僕がシグナム二尉の後ろに回り、昏倒する一撃を放つだけです」

「シグナム二尉の反省点は”レアスキル”だと信じてしまったことと、”撃時に姿を現す”ことを弱点と判断するには早計だったこと

ですね」

以上です、と言って話を終える。

「質問は？」

皆さん何も言ってこないので、失礼しますと言って部隊長室を出ていく。

あんまり話したくなかったんだけどな…。

幻術は僕の切り札だし、口がうまいのも一応幻術が切り札足りえる要因の一つだし。

ＳｉｄｅＯｕｔ

「いや～…危険すぎるやろ……彼」

守護騎士一同が頷き同意する。

「ジュンがね――ジュンがなんて言われているのか知ってる？」

フェイトが言って全員で考える、がやがて全員が首を振る。

「”絶対強者”らしいよ」

それを聞いてその場にいた全員が息をのむ。

相手が自分の情報を持ってない限り負けることはほぼありえない。

しかし、ジュンは数限りない変化をピックアップし、その中から最も有効な手段を考える力があり、それを実行する度胸もある。

さらに、戦場では彼は常に冷静。
指揮官の才能もあり、戦闘では単独でSランク魔導師を抑えるほどの力。
これを見た武装隊の魔導師がつぶやいたそうだ。

――彼こそ絶対強者と呼ぶにふさわしい――

と。その次の日からジュンは”絶対強者”と言われついでに”フェイト執務官の切り札”と呼ばれだした。

数少ない魔法を駆使して――
幻術を巧みに操り――
相手に悟られずに背後をとる。
この戦い方はまさに――――

「――――暗殺者、やね」

第2話　模擬戦（後書き）

さて、第2話ということせすが、どうでしたか？

あ、言いたいことはわかります。

戦闘シーン書くの下手すぎと言いたいんですよね？

そんなことは自分でもわかっていますとも……。

なぜ私は戦闘シーンをうまく書けないのか疑問です。

一種のコンプレックスといってもいいかもしれません。

ＰＬは投稿してない作品でも毎回シリアスに書けるんですがね？

でも力が入るのって最初と最後だけなんですよね…私は。

意外とあっさり負けましたね、シグナムさん。

打ち合ってすらいませんし。

もはや相手がシグナムの意味がありませんね。

まぁ、彼女も生粋の”戦闘狂（バトルジャンキー）”ですから喜んでくれているでしょう。

では今回はこの辺で、次回、おそらく一気に飛ばしてファーストアラート辺りまで行くと思われます。

それでは、最後まで読んでいただきありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0250z/

魔法少女リリカルなのは　StrikerS　～小さな少年の小さな勇気～

2011年12月7日01時45分発行